

天災は忘れたころに



寺田寅彦と高知

[高知県]

「なぜだろう」。いつも寺田は不思議と向き合った。

日本は世界有数の火山列島、地震国だ。近年は全国各地で大規模地震が発生し、併せて大型台風や豪雨も頻発している。メガ台風の襲来、南海トラフ地震なども迫るといわれ、こうした自然災害から国を守るため、より高度な科学の力がいっそう求められる時代となった。

太平洋に面し、しばしば台風の直撃を受け

る高知県の防災意識はかなり高い。地球物理学の権威、寺田寅彦が気象・地震・海洋などの研究にかけた情熱は、このふるさと高知の存在を抜きにはできないだろう。

明治11(1878)年、東京に生まれた寺田は、幼少期に元々高知の土族だった父の故郷に移る。高知城に近い江ノ口に広い敷地を構え、100坪を超えた邸宅は、現在は寺田寅彦記念館となり公開されている。ピアノを置いたり、離れに勉強部屋をついたり、ここでは当時、父親の利正が長男に注いだ溺愛

ぶりがよくわかる。

地元の江ノ口小学校から、名門・高知県立尋常中学校(現高知追手前高等学校)に入学



いつも学生らに問いかけた言葉が刻まれる。

する。明治29(1896)年に、熊本第五高等学校に進むが、ここで出会った物理教師の田丸卓郎と英語教師の夏目漱石から、大きな影響を受け、科学と文学の興味を一気に目覚めさせる。その後、東京帝国大学(現東京大学)に進み、首席で卒業。大学に残ってからは、海洋学、地震学などをはじめとする研究活動に精力を傾ける。また同時に、漱石に認められた文才は、鋭い視点にユーモアを交えた多くの随筆を生んでいる。

寺田寅彦記念館のある江ノ口から、青年期を過ごした追手筋から高知城周辺のゆかりの地を回ろう。寺田が学生たちを前に「ねえ君。ふしぎだと思いませんか」と問いかけた言葉は、このまちで過ごした多感な時代が出发点だ。ドライブの最後は桂浜まで走ろう。雄大な太平洋から届く潮騒を聞きながら、地球の未来を少しばかり考える旅になるだろう。

少年時代の遊び場だった高知城。

高知城は江戸時代初頭の慶長年間に山内一豊が築いた名城。小中学校時代の寺田には、家から近くの楽しい遊び場で、チョウやトンボを追いかけ、木の実を拾っては食べたという。城西公園の側には「花物語」の中にある「昼顔」の文学碑がある。

高知城
高知市丸の内1-2-1 ☎088-824-5701、9:00~17:00、P有



オーテピア
高知みらい科学館、高知図書館、高知声と点字の図書館が一体になった総合文化施設。
高知市追手筋2-1-1
高知みらい科学館 ☎088-823-7767、9:00~18:00 / 高知図書館 ☎088-823-4946、9:00~20:00 / 高知声と点字の図書館 ☎088-823-9488、9:00~20:00

オーテピアの前に建つ寺田の像は、追手筋をはさんで母校を見上げている。

江ノ口川沿いに佇む寺田寅彦旧邸跡。



高知城の北の外堀を兼ねた江ノ口川のほとりに、寺田が19歳まで過ごした邸宅を復元している。石積み塙に囲まれた広い敷地内には立派な主屋のほか、離れの勉強部屋や茶室まである。読書机やピアノなど、当時の暮らしがわかる。

寺田寅彦記念館(旧邸跡)
高知市小津町4-5 ☎088-832-7277(高知市教育委員会民権文化財課)、P有

父の愛が込められた小津神社。



紀州熊野三社権現那智大社を本社にする由緒を持ち、厄除け、病氣平癒などにご利益がある。病気がちの幼い寺田のため、父の利正は石灯籠や石橋を奉納する。

小津神社 高知市幸町9-1 ☎088-873-6602

さまざまな思いが交錯する名勝・桂浜。

子どもの頃に泳いだ場所、先立たれた最初の妻を思う場所。随筆「夕風と夕風」「涼味数題」などに登場する。

桂浜公園
高知市浦戸779 ☎088-841-4140(駐車場)



寺田家の墓所は山の中にある。住宅地の中の小さな案内板を手掛かりに山道に入る。両親と妻たちとともに5基の墓がある。旧邸でガイドマップを手にしてから行こう。
寺田家墓所 高知市東久万



美味しいコーヒーは、ドライブ疲れにも効果あり!

寺田のコーヒー好きは有名。随筆「コーヒー哲学序説」には「コーヒーの効果は官能を鋭敏にし洞察と認識を透明にする点でいくらか哲学に似ている」とまで書いている。オーテピア近くのこの店は、バリスタがフレンチプレス抽出で淹れる美味しいコーヒーを楽しめる。ゆったりとしたテーブル席もある。テイクアウトもできる。

キリグコーヒー 高知市追手筋1-9-16第二森ビル1F北 ☎088-855-9090、10:00~18:00



寺田寅彦(てらだ とらひこ)

明治11(1878)年~昭和10(1935)年

本名同じ。東京生まれ。幼少期に高知に移り、青春時代を過ごす。物理学者。俳人、随筆家としても才能を発揮する。数々の名言が残る。

高知県立文学館



ゆかりの作家たちを「自由民権運動と文学」「反骨の大家文学」「現代の文学」などのテーマ毎に紹介。寺田寅彦記念室を併設する。

高知市丸の内1-1-20
☎088-822-0231、9:00~17:00、P近隣

「随筆の世界に、新しい分野を拓きました」

随筆の中には、新しい発見に興味を抱かせる科学者らしい観察眼や分析力が発揮されています。

主任学芸員 川島 禎子さん



読みたい一冊

表題作ほか、関東大震災の体験を綴った「震災日記より」「流言蜚語」など地震、津波、火災、噴火などの考察、エッセイを収録。講談社学術文庫。



ひと休みトーク Tabi no Bookmark

「天災は忘れたころにやってくる」



寺田寅彦記念館の石垣にある原文は「天災は忘れられた頃来る」。そのほか、現代文に要約して少し紹介する。

「科学者は自然を恋人としなければならない。自然はその恋人にだけ真心を打ちあける」「心の窓はいつもできるだけたくさん、できるだけ広く開けておきたい」「最後の一步は、実はそれまでの千万歩より何倍も難しい」「健康な人は病気になる心配があるが、病人には回復する楽しみがある」。どれもなるほどだ。